

情報コミュニケーション技術（ICT）の受容にともなう
生活の情報化と住空間の変容

- 代表 土橋臣吾（武蔵工業大学環境情報学部 講師）
委員 佐幸信介（日本大学法学部 講師）
委員 祐成保志（東京大学大学院博士課程／日本学術振興会）
委員 鈴木謙介（東京都立大学大学院博士課程）
委員 小林義寛（日本大学法学部 助教授）

[研究報告要旨]

デジタル技術を核とする新たな情報テクノロジーの登場以降、日本における情報化は新たな段階に入ったと言える。中でも注目すべきは、パーソナル・コンピュータやインターネットなどのデジタル・メディアが人々の日常生活に深く浸透していった点であり、長らく「マスメディア＋固定電話」を基本形としてきた家庭の情報環境は大きく変容しつつある。しかしながら、こうした事態の進展にもかかわらず、日本の家庭における新たな情報テクノロジーの実態を捉える試みはいまだ十分にはなされていない。

こうした問題を念頭に置きつつ、本調査研究では、まず家庭空間における新たな情報コミュニケーション技術の受容を考えていくための理論枠組みを検討した。その際に、R.シルバーストーンらによって提唱されている、テクノロジーのドメスティケーションのモデルを批判的に検討し、アクター・ネットワーク理論の観点から、モデルへの理論的修正を加えた。その上で、こうした理論的作業に基づきつつ、家庭における情報テクノロジーの文化的統合のプロセスを捉えるためのエスノグラフィックな調査を実施し、その知見から、家庭という場を社会－技術的な空間として捉えることの重要性を指摘した。さらに、テクノロジーの消費者と生産者の関係の変化の可能性を探る意図を込めて、今後の家庭における情報テクノロジー利用の主要なアクターとなる子どもたちを対象にした、文京区でのコンピュータ教育のワークショップに参加観察を行った。